

『リーチとクルー』 Dixna レバー



▶ドロップハンドルの自転車に乗る人が増えて『スピードは出るんだけどなんだか無理してどうも不安』…と感じていた人も増えていたであろう2007年頃。…不安なところをどうにか解消できないか、との思いをアレコレ具現化し始めていました。

(参照: Vol.23 はじまりは「ジェイフィット」から)

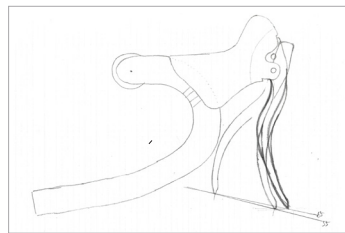
▶ドロップハンドルでのブレーキレバーは、ブレーキ操作として理に適っているのかどうかはさておき、例えば手の小さな人にはどうなのか、と言えば決してやさしいものではありませんでした(今はかなり改善されていると思います)。ブレーキ操作のしやすさをハンドル形状から考えたのが「ジェイフィット」でしたが、そもそものブレーキレバー自体の形状に的を絞って考えたのが、今回のテーマである『リーチとクルー』・・・「ジェイリーチ ブレーキレバー」(2011年)と「ジェイクルー レバー」(2013年)。それぞれのミニストーリーを写真とともに紹介します。

ジェイリーチ ブレーキレバー

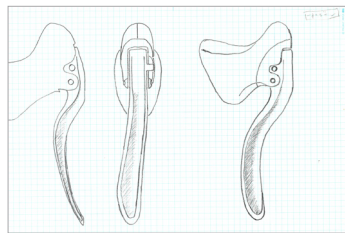
ブラケットが小振りで握りやすい既存ブレーキレバーのブラケットボディー部分を流用しながら、大ぶりのレバー部のみを新たに設計して、ブラケットポジションでもドロップポジションでもレバーまで届く距離(リーチ)が出来る限り近い製品を目指しました。



▲土台になった既存モデル。



▲レバーリーチを如何に短くするかを追求した最初のデッサン。レバーの引きしるとハンドルのアールとの限界点を見極めながら、より形状に沿った滑らかな曲線を探りました。



▲自転車機材の中で一番繊細にライダーが触れる部分とも言えるブレーキレバーの触れ心地にも拘り滑らかに設計し、“てこ棒”であるレバーの長さも小さな力で済むよう工夫しています。



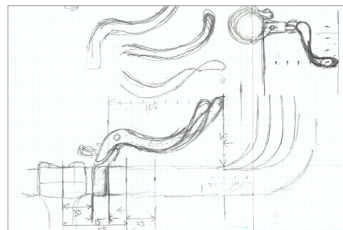
▲最初のデッサンから2ヶ月というスピードでテスト可能なプロトタイプが完成しました。ここから更に双方の引きしる限界点ギリギリの曲線に近づけ、表面を削り足してタッチ感を高める変更を重ね最終段階に進みます。



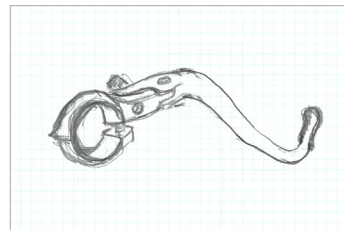
▲4ヶ月で仕上がった「ジェイリーチ」。ブレーキに専念したモデルとしては操作性がとてもしっかりとした製品になったと自負しています。2018年には多くの要望からブラックレバーを追加し現在に至ります。

ジェイクルー レバー

ドロップハンドルが如何に多様な形状か、それは歴史が証明していますが、その基本は4ポジション(トップ・ショルダー・ブラケット・ドロップ)。中でもショルダーポジションでスピードコントロールができる「手がかり= Clue (クルー)」となるレバーの形状を追求しました。



▲トップポジションでの操作に特化した既存のサブ(補助)レバーを土台にして、ショルダー部での操作方法を考え始めた初期デッサン。多くのハンドル幅にどう対応させるかも課題に。



▲トップとショルダーでのブレーキ操作に特化した「ギドネットレバー」も参考にしながら、通常のブレーキレバーとの併用による4ポジションでの操作の実現を模索していました。



▲図面化は難しく基礎は針金で作ります。操作場面で、指を機材に合わせるのではなく、機材が指に寄り添ってくれるような形状が大切です。



▲基礎となる針金に粘土を纏わせて煮詰めていきます。形状の難しさもさることながら、長さ(ハンドルとの距離)の決定にも苦慮しました。



▲粘土を基にスキャンで図面化し出来た樹脂製のモックアップ。実際の感触から細部に手を加えてテストサンプルを作り最終調整を行います。



▲完成した「ジェイクルー」。ブラケット付レバーとともに4ポジション可能な補助レバーとして、使用できます。



◀見様によっては複雑怪奇に見えますが、多様なドロップハンドルに極力対応できるような設計しています。

▶ヒントは茶杓から。(イメージ写真です)



ブレーキ操作を行う“てこ”の取っ手棒であるレバー。うまく指が掛かるように形状を絵や粘土で作っていた時に、「茶杓」を硬い南天の木から作った時のことを思い出しました。名人の作る茶杓は、掬うに特化した先端へのラインが優雅であり見事に指に馴染むものでした。そんなイメージで作ったレバー。特にクルーの先端は茶杓の先端思ひ、指先をすくう形状になっています。